

茶の湯文化学会会報 No.44

第44号 / 2005年3月20日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

河北省文物研究所における学術会議報告

高橋忠彦

当学会の第二回目の海外研究会として、訪中旅行の形で第二十回研究会が企画されたが、その中心行事は、河北省文物研究所と共催の学術研究会であった。会議は、石家庄市にある同研究所の会議室をお借りして、平成十六年八月十一日の午前八時より開催された。席上、貴重な学術報告が多くなされたが、紙面の都合もあり、ここでは要点の報告にとどめる。

河北省文物研究所所長の曹凱氏と、茶の湯文化学会の倉澤会長の両氏から、それぞれ開会の挨拶をいただいた後、五つの研究発表が行われた。

一、河北茶文化研究会副会長、河北省文物研究所研究員の鄭紹宗氏より、「宣化遼墓茶道図の研究」の題で、宣化遼墓壁画の研究の概要が報告された。氏は、『宣化遼墓』などの大著を著された、この方面の第一人者である。最初「茶道図」と名付けた壁画を、他の研究者の指摘で「備茶図」と改称した経緯も紹介された。

二、河北茶文化研究会会長、韓琪氏より、「河北省にある貴重で重厚な茶文化資源を発掘継承しよう」の題で、河北省の茶文化に関する報告がなされた。同研究会は、四月に成立したばかりであるが、遼墓以外に

も、「喫茶去」ゆかりの柏林寺や、盧全の出身地を擁し、北限の茶の栽培に挑戦している河北省は、今後、茶文化事業の発展が期待できることを力説された。

三、高橋が、「日本の絵画より見た宋代の飲茶文化」の題で、日本に残る宋元画に、中国の茶文化がどのように表現されているかを、パワーポイントで紹介した。

四、九州東海大学講師の顧文氏より、「『茶経』から見る宋時代の茶書の論茶」の題で、『茶経』と宋代の茶書との比較研究が発表された。宋代茶書は、『茶経』を意識して書かれながらも、『茶経』に負けまいとする創造の意気が見える。それは、新しい方式の製茶、飲茶を熱心に詳しく観察した成果であり、宋代の時代背景によるものであると主張された。

五、中国社会科学院歴史研究所副研究員の沈冬梅氏が、「宋代茶文化と宋遼茶文化の比較」の題で、発表された。その主旨は、以下の通り。宋代には、契丹人の各階層にまで喫茶の習俗が普及していた。遼墓の壁画より考察すると、備茶の過程と道具の面では、ほとんど宋代の点茶法と同じである。ただ、茶を砕く用具、磁器茶碗の色などの面では、宋代との違いが見られる。また、宋代の「先茶後湯」の習慣に対し、遼地では「先

湯後茶」であり、社会文化の交流と相違を表している。

最後に曹凱氏のお言葉をいただいた後、遼墓出土の貴重な文物を、鄭紹宗氏のご案内のもと、別室でゆつくり拝見することができた。

この会議の企画開催に当たっては、各方面よりご協力を仰いだり、特に河北省文物研究所副所長の郭太原氏にご尽力いただいた。また、会議の際の通訳として、北京大学の藤軍氏と、顧文氏のお力をお借りした。ここに感謝の意を示したい。

研究 会

第二十回研究会を八月九日から八月十三日まで中国の北京および河北省で開催した。河北省文物研究所で行った学術研究会の内容については、高橋副会長の報告の通りであるが、その他の行事については、顧文氏に報告していただく。

河北省の茶文化研究会に参加して

―第二十回研究会報告―

顧文

二〇〇四年八月九日から一三日まで、茶の

バスから降り、遼墓の墓域を囲む赤い塀の門の前で、訪中団一行は、宣化文物研究所のスタッフの方々と合流し、赤い塀の中に入っていく。壁に囲まれた敷地の中に、二つの小さい赤レンガづくりの小屋が建っている。この城門を模した形の簡素な小屋が遼墓の「一号墓」と「二〇号墓」の入り口である。研究所のスタッフが手前にある小屋の前に全員を集合せ、小屋の鉄の扉にかかる錆びた鎖の穴に鍵を挿し込んで、「一号墓」の扉を開けてくれた。門の高いしきいを乗り越えようと、すぐ下へ降りる急な階段が足元に見えた。最大二人しか通ることができない墓道が底の見えない下方へ伸びている。墓室へ降りて行くうちに、すっととした涼しさが身体を浸してくる。地下墓の中の温度は一六度で、蒸し暑いこの夏の旅に、思いもよらない心地よい一瞬であった。今回見学できた二つの墓とも、「双式墓」と呼ばれる二つの墓室によって構成されたものである。「一号墓」の後室の西壁には、「点茶図」の絵が描かれてある。二人の人物が、中心にある方形テーブルを挟んでいる構図である。一人は、湯瓶を持ち、もう一人は左手に茶碗と茶托を持ち、右手に茶杓子を持っている。墓室の主人のために茶を

湯文化学会の第二〇回研究会として、中国北京と河北省の宣化・石家荘を巡る四泊五日の旅が、訪中団の形をとって実施された。この訪中団の主たる目的は、張家口市宣化区の遼墓の見学と、石家荘市の中国河北省文物研究所における「遼・宋代の点茶文化に関して」をテーマとした日中共同の学術研究会に参加することであった。そのため、訪中団の日程では、まず北京の西北にある宣化の遼墓を見学することになっていた。

宣化の遼墓とは、遼(九一六―一二二五年)の晩期である一二世紀初め頃の、漢族張氏一族の墓群である。一九七一年から一九九八年まで相次いで発見され、世間を驚かせていた。今回見学に行った「下八里宣化遼墓」の六つの墓(一号墓、二号墓、五号墓、六号墓、七号墓と一〇号墓)には「備茶図」と呼ばれる、点茶の様子と茶器を描いた壁画が発見され、中国茶史研究にとって貴重な資料となっている。これらの「備茶図」は、今まで他に見られなかった点茶法の過程を表しており、墓の主人公の生活を明確に反映したものである。遼墓には大量に出土した茶道具があり、その地方の生活を映し出した壁画があり、日本の茶の湯文化のルーツを探る上にも、見学対象

点てる様子を表しているのである。「一〇号墓」の前室の東壁には、「備茶図」の絵が描かれてある。五人の人物が、茶碾と、湯瓶を暖める蓮華座の形をしている風炉を囲む構図である。団茶を碾く児童、風炉の前で火を起すため息を吹く児童、茶托と茶碗を捧げて主人の元に持っていく婦人、同じく茶托と茶碗を捧げて主人の元から持ち帰ってくる婦人、そして湯瓶を取ろうとしている男性が描かれている。茶を用意する動きが整然と行われている様子である。スタッフは、これは茶を用意する工房の風景に見えるという。しかし、肝心な墓室の主人はどんな風に茶を飲んでいったか、探しても墓室の主人を描いていところが見当たらない。壁画に描かれているのは、すべて壁の向こうにいる墓室の主人のためのものであった。人物の動きも、いかにも壁の向こうにいる主人が茶を待っている様子を暗示しているようである。壁の向こうにいる墓室の主人の飲茶の姿を想像しながら、訪中団の人たちの目が、まだ用途が解明されていない一つの道具に釘付けになり、宣化文物研究所のスタッフとの議論がその場で繰り広げられた。訪中団の人たちにとって不思議な道具、或いは何に使われているか難解な道具であっ

として選択することにとっても重要な意味がある。

遼墓の発掘調査の後、一号墓と一〇号墓を除いてすべて埋め戻されていたが、現在その両者も一般公開をしていない。しかし、今回は茶の湯文化学会への特別な計らいで、訪中団一行が見学できるように、特別な許可をしてくれたのである。九日に北京で合流した訪中団一行一四名は、一夜の休憩を取った後、一〇日の朝七時三〇分に雨模様の中、北京新世紀飯店から出発し、河北省張家口市宣化区にある遼墓に向かった。朝の出発が早かったために、渋滞もなく、我々のバスは「京張高速公路」をひたすら二時間走り、すいすい一八〇キロの道のりを走り抜けて行った。高速公路から降りてきた時には、天気が晴れ模様に変わった。そこから、宣化現地の青年旅行社のスタッフと合流し、バスはさらに田地に挟まれたきれいな道を走る。「下八里宣化遼墓」という道路標識が見えた所で、舗装されていない土の道に入り、土ぼこりをあげながら、村落の住居区の中を通過して行く。途中で人家の前の自転車などの障害物を避けつつ、一〇時一五分、トウモロコシ畑の中に赤い塀に囲まれた遼墓の地を見出した。

でも、地元の人たちにとっては、ついこの間まで、日頃誰の家の台所でも使われていたような道具もあった。例えば、茶筴の形をしていて、ものを洗うのに用いるブラシのような道具であるが、刷毛が、両端につけられている。研究所のスタッフは、子供の頃にそれを台所で使った記憶があるという。最後に、「一号墓」と「二〇号墓」の色彩の鮮やかさの違いについて質問が出された。それは、空気と光による退色であるという。「一号墓」と「一〇号墓」の発掘された時間の差が十年間近くあったため、後に発掘された「一〇号墓」の方が元の色合いを残しているのだという。それを聞いた訪中団一行は、貴重な文化遺産を自分達が汚損する事になってはと気遣い、一刻も早く退室しなくてはとの思いに急かされた。保存のためには光と空気を遮断しなければならぬ。公開展示するためには、壁画から隔てる空間を作る必要がある。文物研究者にとって、多くの人々に古い時代の素晴らしき遺物を見てもらいたい気持ちと、それを長く後世に残しておきたい気持ちとの調和は永遠の課題であろう。現在、この遼墓の壁画を公開展示するため、博物館を建設する計画が進められている。二時間近くこれらの壁画と

対面し、不思議な思いを抱いたまま、遼墓を後にした。

訪中団一行は次に、北京まで折り返して、さらに省都石家荘市に向う。途中、居庸関で長城に立ち寄り予定があった。遼墓のある張家口市は北京の西北に位置するが、共同研究会の行われる予定である河北省の省会（県庁）がある町、省都の石家荘市は北京の西南に位置する。そして、張家口市と石家荘市の間を、北京市の西南に位置する保定市が隔てている。河北省はちょうど北京を囲む形で省の領域を広げている。宣化から、朝にも通った「京張高速公路」で、北京市の環状線の外沿に戻り、そこからまた南下して「京石高速公路」を利用し、石家荘市へ向かう。北京から石家荘までの道のりは二八〇キロある。中国現地の青年旅行社のガイド韓さんは、この旅で移動する長い里程を見て、三三人乗りの座席に良いクッションのついたバスを特別に用意してくれたという。この旅の移動距離は並ではないと言える。午後二時に折り返し、やつと高速度道路から降りたのは、夜の八時四五分である。途中四時頃に四〇分間だけ居庸関の長城に立ち寄ったのを除けば、実に六時間以上の長旅であった。その間の距離は五〇〇キ

ロ近くになる。

石家荘市に近づくにつれて、道路の両側のネオンが増え、都市の明るさも感じられてきた。夜一〇時にやっと、夕食のレストランに着いた。河北省文物研究所の郭所長がずっとレストランで待っていてくれた。そこで、ゆっくり挨拶する暇もなく、ホテルの部屋に戻るまで、明日の研究会について、またその後の日程について、倉澤会長を含めた打合せを行った。一日朝八時にホテルを出て、「中日茶文化研討会」の会場に向う。九時四五分、会議が始まった。省都石家荘市にある河北省文物研究所は、遼墓を管理している研究所である。その研究会発表については別稿の高橋副会長の報告を参照して頂きたい。今回は、遼・宋代の点茶文化に関する学術交流として、高名な鄭紹宗先生にお話をして頂くことができた。その上、鄭先生自ら、館蔵の出土品の一部についても詳しく説明をして下さった。郭所長は「ゆっくりできれば、河北省文物研究所にある他の出土品も見学できる」と言ってくれたが、その日の内に北京に戻るようになっていた。午後は石家荘市の東南五〇キロの所にある趙県柏林寺を見学することになっていた。石家荘市周辺には日本とゆかりの深い

史蹟名勝をこれもあれも見学に行きたいが、悔しいのは時間がないことであった。午後、石家荘市内新華路にある「順記茶樓」に案内され、そこで鉄観音とプーアル茶を頂きながら、店員の茶艺表演を見ることができた。しかし、席がまだ暖まらないうちに、早く次の見学地に向うよう、ガイドの韓さんは、移動時間の調整に四苦八苦の様子である。今晚、何時に北京に戻るか、気になっているという。全員が「順記茶樓」の店長に別れ挨拶をし、駆け足でバスに向った。現在、茶芸館のような茶店が中国全土に浸透している。このような茶芸館の発展が中国茶文化に大きな寄与をするものと期待される。我々は次の見学地である柏林寺に向う。

趙県柏林寺は趙州和尚の公案「喫茶去」で有名な場所である。日本の観光客には人気のある名刹である。特に茶の湯の関係者には、「喫茶去」の名句でよく知られたところである。今回、仲介してくれる人があって、元中国仏教協会副会長で、柏林寺の前住持、浄慧大和尚とお会いする時間を持つことができた。倉澤会長は、「喫茶去」という禪問答について、その精髓である「在当下」（すぐその場で、その時で）の意味を確認できたことを嬉しそ

うに話された。長年の思考がさらに深められたという。訪中団一行は朝の研究会から時間を詰めてここまで来たことに感激した。今日の日程は、やつと柏林寺で終わる。後は、北京への帰路を残すのみとなった。

一二日午前中には、北京のお茶の市場である馬連道と呼ばれる茶城を訪れた。電気専門店が集中する街となった東京の秋葉原、大阪の日本橋のように、茶城は多種多様な茶専門店が集中している街である。馬連道はその中心を通る道路の名前である。最近、その規模が大きくなるにつれて、国内外の観光客を引き付けるスポットになってきた。訪中団もその店の余りの多さに圧倒されてしまった。

夜には、訪中団一行は、「老舍茶館」の雰囲気体験するために出かけた。現在の「老舍茶館」は、客が北京庶民の飲茶を代表する「大碗茶」と茶菓子を載せた円卓を囲んで座り、正面の舞台上で上演される京劇や地方の劇、舞踊、歌、漫才などを楽しむショータイムを提供する場所となっている。昔の中国の庶民的な娯楽が気楽に体験できる賑やかなスポットとして、訪ずれる価値がある。中国三昧のたっぷり二時間、中国語堪能の訪中団の方々は懐かしい思い出を味わうことができたし、

中国語を話せない訪中団の方々にとっても、役者達の表情、舞台の雰囲気鮮烈な印象を残したことは間違いないであろう。この日もホテルに戻ったのは夜一時近くであった。

濃密でタフな日程であったが、明日早朝には早くも帰国の途につくと思うと、慌しかった今回の見学の旅に未練が湧いてくるようであった。もし次回河北省に来る時には、遼墓も立派な博物館の中に入り、保護ガラスの向こうで、あの鮮やかなみずみずしい壁画と対面することだろう。そう思うと、またゆっくり見学に來たいと願う気持ちがふつふつと湧いてきた。研究会で発表した中国社会科学院研究所の沈冬梅さんは、この催しに参加して、これから中国で遼・金と宋の茶文化交流について、そして中国北方茶文化という地域を背景とした茶文化についての研究の必要性がますます認識され、中国茶文化の大きな課題となると感じたという。また今年発足した河北省茶文化研究会にとつて、この機会に茶の湯文化学会との交流ができたことは、大きな励ましとなり、地元の茶文化研究会が担う役割を再認識できたと感じていた。

茶文化研究については、文献研究と文物調査の両方面からのアプローチが重要であり、

茶の湯文化学会の第二〇回研究会のこの成果は、日中茶文化研究者たちに重く受け取られたことであろう。

発表者募集

大会・研究会・例会の発表者を募集しています。大会については報告二〇分、質疑応答一〇分です。本年度大会は、五月二二日（日）に京都市の池坊短期大学で開催します。発表を希望される方は八〇〇字程度の要旨を添えて四月二二日までに事務局までお申し込みください。研究会・例会の報告は六〇分程度です。この発表を希望される方も、事務局までご連絡ください。

記念講演会

本会の創立十周年を記念して、十一月七日京都市中京区のウイングス京都で記念講演会（第一部）を開催した。戸田勝久副会長の挨拶の後、午前中、当会の副会長で元お茶の郷博物館館長の小泊重洋氏による「世界のお茶」、日本中国茶協会会長の王亜雷氏による「中国茶の現状について」、龍谷大学教授デニス・

ヒロタ氏による「日本の茶の湯と現代」の講演が、午後には元台湾区製茶工業同業公会理事長黄正敏氏による「台湾のお茶」、慶北大学教授朴龍求氏による「韓国のお茶の生産と消費」、当会の理事で沖縄県立芸術大学教授のH・S・ヘンネマン氏による「日本の茶文化論への問いかけ」の講演があり、倉澤行洋会長のとめを以て閉会した。要旨は次の通りである。

世界のお茶

小泊重洋

ツバキ科植物チャ(Camellia sinensis)は、照葉亜熱帯樹で中国を原産とする。この植物によって作られる茶は、三五以上に及ぶ国と地域で栽培され、世界中で愛飲されている。二〇〇二年現在の世界のチャ栽培面積は約二三五万ヘクタールであり、生産量は、約三〇〇万トンである。このうち、紅茶の占める割合は約七一%、緑茶が約二四%、烏龍茶、その他が約五%となっている。生産量が最も多いのは、インドであり、次いで中国、スリランカ、ケニア、インドネシア、トルコ、ベトナム、そして日本の順となっている。世界的に生産されているのは圧倒的に紅茶が多いが、

緑茶についてみると、約七三万トンのうち、約五四・六万トン(七四%)が中国で生産され、次いで日本(八・四万トン、一一%)、インドネシア、ベトナムの順となっている。以下に紅茶の主要産地を概観する。

インドで著名なのはアッサムとダージリンである。アッサムはインドの北東部にありインド紅茶の約五〇%を生産する。七月から九月に生産されるセカンドフラッシュが高品質である。味は濃厚であるが渋みはあまり強くない。水色はすんだ赤色。ダージリンは、ネパールとブータンにはさまれたインドの最北部で、海拔六〇〇〇フィートの山間地。中国雑種が主で、時期によりフレイバが異なる。ファーストフラッシュは渋みのきいたグリーンニッシュタイプ。五、六月のセカンドフラッシュは上品でまるやかなマスカットフレイバが特徴で世界的に著名である。スリランカでは、標高により高、中、低産地に分けられ、ウバ、ヌワレリアなどの高産地の紅茶が香り高く、水色も鮮やかな黄金色で世界的に著名である。ケニアは新しい紅茶産地として、ここ四〇年来急速に進展している。ほとんどCTC製法で、ブレンド用として多く使われる。トルコは、一九三八年から本格的な生産を始めたが、日

本より茶園面積は広く、国内の消費量も多い。中級品を生産する。インドネシアは、ジャワティーとして我が国にも知られるが、多くはブレンド用として用いられる。茶の消費を国別に見ると、インド、中国、ロシア、日本、トルコの順で、ロシア以外は生産と同時に消費も盛んである。しかし、一人当たりの消費量(二〇〇〇・二〇〇二年)は、イラク、アイルランド、リビア、カタール、イギリス、トルコ、クウェートなど中近東の国々が多くなる。日本は一位である。最近、紅茶生産国では、価格の低迷に加えて、生産コストの六〇〜七〇%をしめる労働費が高騰し、経営を圧迫している。また、飲用形態も簡便化指向でCCTCを主体としたティーバッグが主流を占め、茶器、茶道具にこだわる喫茶文化は大きく変わろうとしている。

中国茶の現状について

王亜雷

中国の茶の産地は、日本の産地と大体同じ緯度で、北は山東省、西はチベット、南は海南島まで広がっている。茶の生産は、一九八〇年から二〇〇三年までの間で大きな変化はない、生産量は三〇万トンから七六万トンに格も高い。例えば、安徽省六安の茶のひとつ「華山銀毫」は、一キロあたり一四万円もする。なぜかというとなら大体一キロの中に三四万个の芽が入っているからである。中国では有名な歴史的銘茶が多く、中国政府も銘茶の原産地を保護し、銘茶生産が増えている。

現在、日本の緑茶の消費量は年間約一〇万トンとされているが、国内の生産量は九万トン未満で、一万トン不足し、輸入が必要である。主な輸入先は、一九七〇年代は台湾で八七〇〇トン、あとスリランカ、インドなど合計約九〇〇〇トンで、中国大陸はゼロであった。しかし、現在は中国大陸が一番で、台湾は減少した。ベトナムも日本の緑茶を多く生産している国である。

中国では現在有機栽培に関心が高い。有機栽培は九〇年代以降生産が始まり、現在の生産量は大体四〇〇〇トンである。これは生産量全体の〇・六%にすぎないが、中国農薬部や研究機関は毎年、有機栽培茶のシンポジウムを開催し、生産に力を入れている。

中国には農業大学の中に茶学部(学科)を持つ大学が一〇校ある。その中で一番古いのが安徽農業大学で、もともとは復旦大学の農學院茶葉学部であったが、一九五二年に上海か

増大している。生産量のうち三分の一が輸出、三分の二が国内消費に回っている。

現在、中国における一人当りのお茶の消費量は毎年三三六グラムで、まだ日本より少ないが、急速に増加しつつある。インターネット上のアンケート調査によると、茶が好きな人が八八・六%、コーヒー好きな人は五%、どっちでもいい人は六・四%で、茶が好きな人が圧倒的に多い。なお、現在の世界の茶の消費量の平均は、一人当たり六四グラムである。世界の消費量を見ると、一番はインドで二番は中国である。中国では、年配の人に茶好きが多い。統計によると六五歳以上の人が一・三二億人といわれており、全人口の大体一〇%を占め、二〇五〇年には約二七%になるといわれる。この事情からも中国の茶の消費量の増加が推測される。

一九八四年までは茶を買うのに茶の券が必要で、一人何グラムまでとされていたが、八四年以降は茶の市場が改革され、みんなどこでも買うことができるようになった。また、だれでも茶を売ることができる。しかし、現在、国内の流通経路は混乱し、問題となっている。

農産物の輸出は、中国の総輸出金額の中で、

一九八六年が二四・五%であったが、現在は七・二%に落ちている。茶については、中華人民共和国がスタートしたときの輸出金額は二・二%であったが、現在は〇・一七%で、大体一〇分の一に低下している。世界の茶市場の中では、紅茶、ウーロン茶、緑茶を含めて一六%くらいとなっている。世界の中で、中国の茶の栽培面積が一番、生産量は二番、輸出量は三番である。

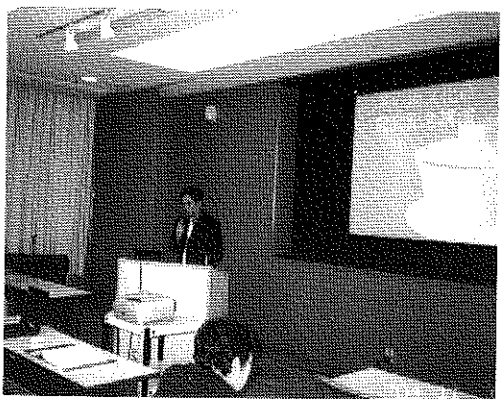
茶の種類別の輸出では、緑茶が最も多く、ウーロン茶、プーアル茶なども安定しているが、紅茶は減少している。緑茶の輸出先は、モロッコが一番、二番はロシア、あとパキスタン、アメリカ、日本などとなっている。ウーロン茶の輸出先は、日本が一番多く二万トンである。

一九八四年まで中国茶は、三つの専門会社によって輸出されていた。一つは上海の緑茶輸出会社、もう一つは広東省の紅茶輸出会社、もう一つは福建省のウーロン茶輸出会社である。しかし、一九八四年以降は、安徽省のようになら茶の産地の輸出会社が設立されて直接輸出できるようになった。

現在、中国銘茶の発展は非常に大きい。銘茶の生産量は全体の中で大体一割を占め、価

ら安徽省に移動した。大学以外にも茶葉専門
学校があり、毎年何百人かの卒業生がいる。

現在、日本では中国茶に対する関心が高い。
東京では中国茶専門店が次々に出店し、毎年
一、二軒新しい店ができていく。私にとって
喜ばしいことであるが、心配なこともある。
それは、本当の中国茶についての理解が不十
分と思われるからである。是非、中国茶の長
い歴史と多様性を知っていただき、中国茶の
味、香りと同時に奥深さを楽しんでいただ
きたい。



日本の茶の湯と現代

デニス・ヒロタ

茶の湯は貴重な伝統文化であるが、日本文
化の外から見た場合、茶の湯はどういう意味
を持つているのだろうか。

いま、グローバル時代になり文化の出会い
交流が起きている。茶の湯には、友情とか有
意義な時間を共有する象徴的な意味があり、
人間の理解の仕方がある。それを明らかにす
ることにより、世界的な土俵の上で対話が成
り立たせることが必要になってきているので
はないか。

天心の「茶の本」により、茶の湯は日本の
代表的な文化になった。しかし、西洋では、
「茶の本」の生まれた頃から、新しい動きが
生まれてきた。それまでの、近代的な絶対的
な自我からものを見るありかたに対する批判
的な動きである。人間は個人個人が絶対的な
存在ではなくて、状況、社会環境、時代とい
つた中でいつも影響を受ける有限な存在である
という考え方が生まれてきた。そういう動き
と茶の湯の対話が可能となっているのではな
いか。

茶の湯では、道具について知識習得や、修
行の必要性など実際のな面と、主と客の関係

や、心構えなどの精神的な面の、二つの面の

重要性が説かれてきた。しかし、岡倉天心や
鈴木大拙の茶の湯論は、西洋人を対象に書い
たものだが、そこにはその二つの面の緊張・
対立は出てこない。まず精神面を伝えていこ
うとしたのであり、世俗的な生き方に対する
批判的な生き方が説明される傾向が強い。大
自然に近づく愛情を茶の湯の精神の一つと
り、ものへの執着などを捨てるのが茶の湯の
思想とする。

しかし、最近そういう考え方が批判されて
いる。日本人にしかわからない文化という考
えに批判が加えられている。茶の湯文化は独
特な文化ではなく、茶の湯の中には人間観が
示されており、人間の文化と捉えることがで
きる。いま、西洋の中に茶の湯を評価する準
備ができていくのではないか。

ドイツの哲学者ハンス・ジョージ・ガダ
マーやフランスの哲学者ポール・リクールの
中に、茶の湯と対話比較できる考え方がある
と思う。ガダマーは、世界をどう理解する
かを考え世界を理解する精神作用の分析を行
った研究者で、対話的な理解の重要性を考えた。

人は、限られた能力や、経験、背景の中に
ある限られた存在で、周りから情報などを受

けものを見ていく。人は、対話的理解の仕方
で、世界を捉えていると考えた。近代的なも
のの仕方とは異なって、現実に近いものの方
方といえる。対話的理解は茶の湯の中に見ら
れる現象である。リクールは、人は出来事を
超越的主体で客観的にとらえるのではなく、
整理し形をつけていくという形で捉えること
を考える。物語として把握する。茶の湯の中
には物語性があり、修行も物語と捉えること
ができる。

茶の湯には新しい展望が開ける可能性があ
る。

台湾のお茶

黄正敏

台湾茶の輸出は、英国茶商ジョン・ドッ
ドへの輸出に始まる。続いて一八六五年にウ
ロン茶をアモイへ、一八六九年にニューヨー
クへ輸出した。

(日本統治時代 一八九五―一九四五)

苗栗以北の低海拔丘にお茶の植付けを奨励
し、農民の米生産の副業として収益増加をは
かった。法人(会社組織)製茶工場の設立の指
導があり、製茶業は許可制度になり、農(人)
・産(法人工場)の契約分業となった。茶試

験場も設立され研究が専門化し品種改良も行
われ、茶業伝習所での製法向上もはかられた。

アッサム種が移植され、南投魚池・日月潭地
域に広く植え付けられ、紅茶工場が設立され、
紅茶を海外に輸出するようになった。

(中国政府台初期 一九四五―一九八二)

一九四八年に上海茶業者から「釜炒り緑茶」
の製法の教授を受け、珠茶・珍眉を大量に北
アフリカ・欧米へ輸出するようになったが、
日本・中国との競争が始まった。しかし、ま
ず日本が撤退し、一〇年後台湾も中国に負け
て本商いから離脱した。釜炒り緑茶は国際市
場に負けたが、日本煎茶製造機械と技術の導
入により、日本向け輸出が増加し、一九七三
年には、台湾茶生産量の半分一万二千トン
輸出するまでになった。

(一九八二年以降の台湾茶)

政府が内販に力を入れ始め、一九五〇年か
ら一九八二年に使用された製茶管理法を廃止
し、農家も茶製造が出来るようになったが、
伝統的法人工場は三七九社から現在は六〇社
まで減少している。その内の約一五軒のみ実
稼動しているが、茶生産農家は一万軒以上存
在している。台湾北部は茶、南部は砂糖と言
われているが、茶の個人生産が多くなったた

め、生産は北部から中部南投・雲林・嘉義の
山手に移り、高山茶が有名になった。二〇〇
三年の政府の統計によれば、茶園二二〇〇〇
ヘクタール、年産高二〇〇〇〇トン、輸入高
一八〇〇〇トン、輸出二〇〇〇〇トンで、一人
当たりの消費量は一・五キロで日本の一・一
キロ、中国の〇・三キロより多い。

中国福建南部潮汕工夫茶や日本茶道を学び、
台湾で茶文化が流行している。一方、ティー
バッグも、便利のために普及し、泡沫茶も若
者に受け入れられている。

台湾茶の主な種類は、清香(チンシャン)、
直形と球形の包種茶、凍頂高山茶。濃い味
(老人茶、熱茶)と香檳(チャンペン)。台湾
烏龍茶のいれかたは沸騰した湯を使うことで、
第一煎を捨てるのは間違いである。第一煎に
は繊維分やエッセンシャルオイルが含まれて
いる。台湾茶未来の悩みは「有茶葉、無茶業」
で、生産者は個人主体となり、農薬・衛生・
管理・情報の指導は困難になり、茶業者は製
造販売について勉強が不足している。茶の輸
入が増え、台湾市場に溢れる恐れがある。

韓国の茶の生産と消費

朴龍求

韓国の茶の歴史は、「新羅興徳王三年（八二八）年、唐から人廉が持参し智異山に植栽した。茶はそれ以前からあったが、これ以後盛んとなる」と三国史記に記されている。新羅が滅びたあと、高麗時代（九一三—一三九二）には、仏教文化と一緒に茶は盛んになった。しかし、一三九二年、儒教立国となった朝鮮王朝時代には、一般人たちは茶から遠ざかり、一部の僧侶たちによって茶文化は継承されてきた。韓国戦争（一九五〇—一九五三）以後、一九七〇年から韓国茶産業が再興し、一九八〇年から次第に茶飲用人口が増加し、二〇〇〇年代には一人当たり茶消費量は八〇グラムに達し、近い将来には一〇〇グラムを上回ると推測される。茶消費は、経済成長と福利意識の拡大により健康のため茶を飲む人が増加し、韓国茶産業も新世代に向かいつつあると期待される。しかし、韓国では北緯三五度以北の地域では、茶を栽培することができず、南部の一部地域のみで茶を栽培しているので、生産量には限界がある。現在の韓国の茶栽培面積は、約一五〇〇ヘクタール（二〇〇二年）に過ぎず、中国の九〇万ヘクタール日本の五万ヘクタールと比較しても極めて小面積で、生産量も消費量の半分程度に過ぎない。不足

分に対しては、外国からの輸入が考えられるが、現在、TRQ (tariff rate quota) 制度に適用した関税率は五—三％に達し、他国の茶は容易には輸入できない。しかし、最後にはWTO協定により関税率の引き下げが行われ、周辺諸国からの茶製品が韓国市場を攻略するであろうと考えている。現在の韓国茶の価格は、日本の茶の価格に比較して、平均二—三倍以上高い。したがって、韓国は茶市場を守るため、茶の国内生産戦略とその対策を早急に樹立することが重要と考える。

日本の茶文化論への問いかけ

H・S・ヘンナマン

学問の近代化は、西洋学問体系の導入であったし、文化の近代化という変貌をもたらした。日本の伝統的文化は、学問の近代化のもと、花鳥風月の風流という日本の文化の普遍と西洋の普遍の対比の中で固定観念的陳腐化を促進し、本来の意味での勿体ないものになってしまった。茶湯文化の近代化すなわち芸術化は、西洋的芸術概念を当てはめることによりなされたとされている。本来東西の伝統は根本的に違うものであったが、近代的芸術化は伝統伝承の理論など広範囲にわたった。没作

品的心の技や亭主の深い自覚が求められ、人間自身が作品であるといった芸道が、純粹芸術的に作品と作家と受容者に分けられ美と用へと近代化したといえる。秘事口伝が近代化により体系的芸術論に変わり、狭義の言語による芸術教育に変質した。その状況の中で茶の湯は、教えようもなく習いようもない道であり口伝によるという伝統的伝承思想がその意味を失ったのか、現代においてもなお向き合うべき茶湯文化なのかという問いかけがここに存在する。このような茶湯文化論は、前近代と近代の狭間における茶の文化史とも大いなる関係にある。江戸後期に蘭学に始まり明治に本格化する西洋流弁説のみならず言葉そのものが表現する心も大きく変化していることに原因がある。所謂近代化全盛時代における廃仏毀釈や日本語並びに漢字廃止論、あるいはおびただしい西洋語翻訳の明治新語や言文一致体のような政策による破壊は、近代化の妨げになると考えた確信的破壊であった。それと同様に、敗戦における日本の過去はすべて間違いであるという文化敗北が招いたのは、常用漢字制限や新漢字体、現代仮名遣いへの変更、それに数多のカタカナ外来語である。明治と戦後の両時代がもたらしたことは、

文化継承の断絶すなわち現代日本人と過去の日本人その生活文化や文化遺産の継承を断ち切ったことではなかったか。芸術文化による伝統と創造を考えると、いずれの文化も、過去に依存し伝統から現代の生命を得ていることに気づく。芸道における現代と伝統、近代と前近代、体験と体系、主観と客観の対立は極めて重要な問題を提起している。学問の近代化において、伝統と創造が理論化されなかつたためその間に隔たりが生じ、時に相容れないものになった。

本来最も優れた伝統的芸道思想の理論的方法を二つに纏めれば、筆なし、師なしになる。茶が書き付けを嫌うのは、密教や禪宗の教えに学ぶところである。体験による高度な理論

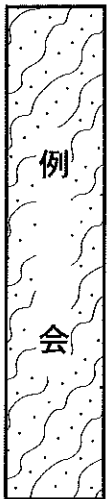
伝承は論説による伝承を拒否する。近代の茶の湯者は秘伝解放を唱え、大量の論説が生まれたがその対応の是非が問われている。日本の芸道思想が哲学的側面を見せながら、独自の思想体系をなしている。伝統と称する文化継承は、その明治の訳語の意味ではなく東洋本来の語釈によれば、系統を受け継ぐことである。師という言葉もまた、時代時代の継続的記録を意味する。

近代になり伝統的文化を自己批判自己否定

をし、西洋比較による自己矛盾を克服するために西洋理論に乗じた日本文化論を展開してきた。それは対等な比較ではなく西洋の物差しで日本の伝統文化を測ろうとする自己批判自己破壊につながる。現代人の目で見て評価する場合も、世界に通用するなどといった表現が目につく。伝統的な方法を生かし西洋的な普遍に寄りかかるとをやる時代がきている。伝統文化論や比較文化論が抱える矛盾は明らかで、西洋由来の方法論による価値観をもつて東洋の芸道をはかり究明しようという現行の研究姿勢は、単なる西洋の尺度による権威付けにすぎない。

総会・大会のお知らせ

来年度の総会および講演会、懇親会を五月二一日（土）に、大会を二二日（日）に、京都市の池坊短期大学で開催します。新緑の美しい京都でお目に懸かりましょう。



東京

本年度第三回目の例会を、七月一七日の午

後二時から東京芸術大学で開催した。

岡倉天心の茶の湯

依田徹

岡倉天心の日本美術論を通覧したとき、茶の湯は生活の中に美術を取り込ませようとする働きとして位置づけられていることがわかる。実はこのような、「人生の芸術化」という認識こそが、天心の芸術論と「禪」、そして「茶の湯」を結びつける要となっている。また近代茶道史の視点から見ると、天心が茶の湯全体に及ぼした影響の大きさを認識する必要もある。田中秀隆氏が指摘しているように、一九二九年の『茶の本』刊行の影響は、文庫本という形態を通じて茶の湯の芸術性を社会全体に流布したという事実に着目する。以後茶道具を芸術作品として語る言説は数限りなく量産されるが、その背後には常に天心の力強い断言が息づいていると言えるだろう。

これに加えて強調したいのは、天心が主張した「不完全の美」と茶道具の関わりである。天心の工芸の評価は、絵画的・彫刻的な要素によつてはいるが、天心が用いた「不完全」とは、本来水墨画の余白などを説明する際に用いられるものであり、桃山の陶器などのゆが

みの造形性を指しているとは考えにくい。一九三五年に刊行が開始された創元社の『茶道』で、西堀一三や満岡忠成が桃山陶器などの造形を「不完全」と記述しているが、『茶の本』の影響の可能性を指摘することができる。

地方茶の湯文化史の研究『房総風雅史』

小倉光夫

近年「地方史」の出版が盛んになされているが、房総の「地方史」の中で茶の湯文化が取り上げられることはほとんど無い。茶の湯文化史の考察のためには、房総関係史料の中から茶に関するものを採り当て、史料から史料へと検索を続け点から線につなげる作業が必要である。地方史の中の「茶の湯」は多くは特定の個人の行動であり、それだけでは「茶の湯文化」のどのような流れの中にあるのかわからない。その背景にある歴史文化や当人の出自・系譜などを手練っていくことで、「日本の風雅」の流れの中に位置づけることができる。

房総には、鎌倉時代に千葉氏が源頼朝と結ぶことで勢力を広げていたが、京都の公家と繋がりを持っていた。また房総は鎌倉の諸寺院の影響下にあった。そのため宋より伝わっ

た仏教とともに茶の文化も早くから伝わっていた。江戸時代になると、多くの大名や旗本の支配地に分割されたため、文化が一本の筋の通ったものとして育たなかったきらいはあるが、堀田家の茶湯や近代の茶湯には見るべきものがある。

例会の御案内

東京例会

四月二三日(土)に次年度第一回目の例会を、五月二八日(土)に第二回目の例会を東京芸術大学において開催します。ふるってご参加ください。

○四月二三日(土)午後二時から

「『山上宗二記』に見える銭屋宗訥について」

生活と芸術研究会

「『大正名器鑑』の利用法―紹陽茄子、松本茄子などを例に―」

田中秀隆氏

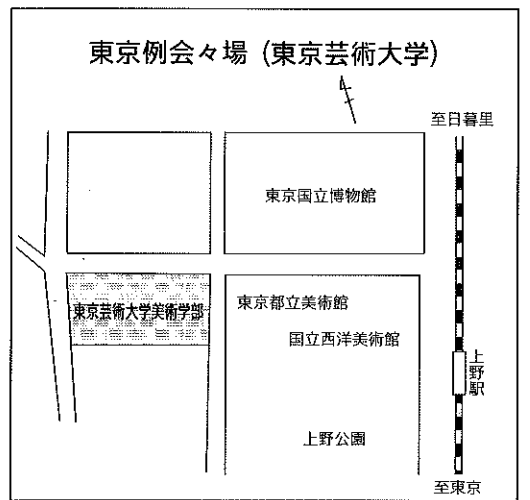
○五月二八日(土)午後二時から

「錢椿年の『茶譜』と願元慶の『茶譜』」

高橋忠彦氏

「岡倉天心『茶の本』の英語―「絵筆を持たない画家」の言語表現―」

東郷登志子氏



後記

*二月の記念講演会、東京例会、近畿例会をもって本年度の行事はすべて終わりました。記念講演会の第二部は、参加者も多く充実した会になりました。講演の要旨は、次号に掲載します。

*本号は、二月発行の予定でしたが、一月ほど遅れてしまいました。お詫びします。